

平成23年度 学術研究助成金〔一般研究〕実績報告書

平成24年 5月14日

日本大学 総長 殿

氏 名 森 寺 英 勝



所属・資格 日本大学高等学校 教諭

下記のとおり報告いたします。

1 種目	一般研究(個人研究) / <u>一般研究(共同研究)</u>
2 研究課題	教育学習カードの活用と応用—授業との実践・社会への還元に向けて—
3 研究目的	<p>① 「図書館推進事業」の内容である「調べ学習」と授業の連携に参加し、カードによる学習への知的興味を促す一方で、「学習性」と「コミュニケーション」の深化をはかる方法をさぐる。</p> <p>② カードによる「定着率」判定システムのプログラム化と「データ分析資料」の完成。</p> <p>③ 小学校・中学校に共通して使える「オリジナルカード」の製作と今後の研究展開にかかわる「CD-R」の製作。</p> <p>④ 一般社会への還元と生活指導での応用を模索する。</p>
4 研究概要	<p>研究段階を第1クールから第4クールにまで分けて、重層的な展開になる事も考量しつつ確実に処理する。そのためには共同研究者に対して負担にならないように配慮し、業務委託や状況を見合わせての分担作業ならびに出張も個々に行う。なお研究協力者も多いので、パワーポイントなどを活用して交互の連絡をはかる。「出前授業」に関しては肖像権を配慮しつつビデオ撮影し、調査結果は当該校へ報告する。データ分析には十分考慮をし、プログラム化したもの、オリジナルカードの著作権は獲得し、特許取得も視野に入れる。研究成果の社会的還元として、新たに作製した「行事カード」などは学校関係者に配布する。</p>
5 研究組織	<ul style="list-style-type: none"> ・研究代表者 森寺 英勝 ・研究分担者 (役割分担) 泉 茂雄 (調査・製作) 押尾 良仁 (調査・製作) 齋藤 善徳 (渉外・企画) 榊原 一雅 (情報処理・会計) 寺田 晃 (調査・模擬授業) 中園 健二 (出前授業・渉外) 松川 良隆 (企画・出前授業) 前澤 良治 (企画・連携授業) 宮原 美佳 (渉外・会計) 渡邊 牧子 (出前授業・製作)

※ホームページ等での公開の (可) / (否) いずれかを○で囲んでください。否の場合は、理由書を添付して下さい。

部科校名：日本大学高等学校

氏名：森寺 英勝

・研究協力者（役割分担）	石川 利之（記録・模擬授業）	日本大学高等学校	教諭（理科）
	佐藤 俊宏（調査・模擬授業）	日本大学高等学校	教諭（理科）
	関口 妃奈子（記録・模擬授業）	日本大学高等学校	教諭（国語科）
	鶴田 愛（記録・模擬授業）	日本大学高等学校	教諭（理科）
	原 哲郎（調査・模擬授業）	日本大学高等学校	教諭（英語科）

6 研究結果

研究経過と結果

本研究は、平成18年度の学術助成金〔共同研究〕を基盤とし、文科省の図書館活性化推進総合事業に応募した内容を、日本大学が求める「学術研究」に組み込んだものである。

前回の共同研究では基礎研究が課題であり、そのためには多くのデータを揃えることが課題とされた。共同研究者と小学校の先生方が連絡をとり、4校400人（総計800件）のデータ調査から、多くの知見を得た。そのデータから見えたことは、低年齢の方が「定着率」が高いこと、あるいは難音訓とされる漢字（画数が多い。一般的ではない）ほど「定着率」がより高く、記号性（あるいは象徴性）がどのように生徒に「作用」したかの把握が今後の課題ともなった。

平成22年の文科省図書館推進事業への参入を試みたのも、この「作用」を別角度から見るということを視野に入れていた。内定を受けたが実施出来なかったことで、新たな思いをもって、今回の〔共同研究〕に臨んだ。

その新たな方策の一つがデータのプログラム化であり、研究成果物のグレード変化とアンケート内容の変更にあった。また図書館と情報授業の連携に「カード」授業を挿入するというのも、「作用」の別角度の再挑戦でもあった。

出発当初は順調であった。連携授業も実施し、パワーポイントによる研究協力をいただく方への説明準備が整った矢先に「東日本大震災」が起こった。

パワーポイントによる「教育学習カードの活用と応用」は共同研究者と研究協力者との相互理解ならびに進度徹底をはかる目的で作成し、今後様々な分野での協力や理解を得るためのプレゼンテーション的な部分を、より一般的な観点から見直しつつ（卒業生の協力もあって）、より完成度の高いものに仕上げた。その最中、具体的な施策を行う横浜地区では、年間計画の見直し・計画停電による授業の遅れなどが進行していたのである。このことは大きく研究展開に影響した。まず「出前授業」を快く引き受けてくれる小学校がなかった。本来なら3月の下旬に出前授業の打診を行うところ、結果的には12月1日まで「出前授業」がないまま進んだのである。

その間行ったことはイラストレーターとの打ち合わせを早めにし、「行事カード」の作製を繰り上げて、できれば本校主催の「オープンスクール」に間に合わせて、実践を積み上げ、研究協力者一同への披露だけではなく、問題点を早めに洗い出すことであった。おかげで「行事カード」作成の難しさを各研究者が認識し、とりあえずは「行事内容」でなく、データ取得を第一目的とするという共通認識を得て、コミュニケーションツールとしての意義付けを再確認することになった。

平成23年12月1日、横浜市立新吉田第二小学校で「出前授業」は実施された。当該小学校の先生方の協力によって、3クラス150人分の「事前・事後アンケート」データと通常アンケートを頂いた。この新データと旧データ（十二支データ）を新たに作成したプログラムに注入抽出し、都合750件、事前事後を合わせると、およそ1500件の新データを獲得したことになる。

その後、この「行事カード」と「十二支カード」は業務委託により工場生産にまわし、横浜市内での「出前授業」が新たに要請されたとしても可能な状況をつくるつもりが、「震災支援」へと展開する。そもそも震災がもたらした「出前授業」の遅れであり、工場生産という早期大量生産であったわけで、震災支援を超えた「教育支援」をどうしておこなわないのだという内なる声に、呼応したことになる。目的は、このカード自身が持つ力（記憶定着率アップとコミュニケーションツールとしての機能）と人々が集ってもたらずかもしれない「心のケア」を期待したのである。

以下研究結果を時系列で説明する。

部科校名：日本大学高等学校

氏名：森寺 英勝

(1) 「技術・情報授業」との連携（平成23年1月～3月）

文科省の図書館活性化推進総合事業の「計画書」にある「情報授業」との連携は、図書館を含む三者の協力が課題となる。時間調整と課題内容の連絡そして生徒理解である。

問題点の解決を前年度に終え、すでにその結果である生徒の作成した「自己紹介プリント」は「成果物」として提出する予定である。また平成24年三学期には二回目の連携授業が行われ、前年度の反省を踏まえ、さらに記録を残すべくビデオ撮影も行った。これも「成果物」として後日提出する予定である。なお授業展開においていくつかの進化があり、特に図書館を利用しての図書館ツアーは、作成物にも変化を与えた。結果については情報担当者ならびに図書館司書の見解を含めて成果物の中に論述を加えるつもりである。

(2) 「教育学習カード」（行事カード）の製作（平成23年4月～6月）

「行事カード」のイラスト完成にあわせつつ、「行事カード」のパウチを製作した。もちろん研究用と小学校持参用として約10セット作製した。前述のように本校オープンスクールで事前の実践を行い、各研究者からの意見をいただき、修正したものをさらに10セット作製した。共同研究者のその後の意見や確認事項などをふまえ、また今後の研究会との話し合いの結果などは成果物として提出する。

またイラストレーターとの打ち合わせおよび協議の結果製作した「イラスト」の著作権については、「本校・日本大学」との間で交わされた「契約書」として事務保管となっている。

(3) 「教育学習カード」を使用した本校生徒対象「行事カード」授業&調査統計（平成23年11月）

「出前授業」前に、本校中学1年生対象の「行事カード」を使用した授業を実施。技術授業内で行うことが、情報授業への＜連携＞になるとの判断から11月末に実施した。対象人数280名、統計累計数560件をデータ化した。プログラムに注入抽出し、研究データとして成果物にしてある。

なお、データの分析ならびにその論考は後日提出の予定である。また本授業はビデオ撮影しDVDに記録として残してある。これも成果物として後日提出する予定である。

(4) 「教育学習カード」を使用した出前授業&調査統計（平成23年12月）

横浜市立新吉田第二小学校において「出前授業」とその授業のアンケート統計調査を実施（H23.12.1）

統計集計資料は数値と図表から構成されている。3学級、累計総数150名の生徒・児童に対する、「教育学習カード」を通しての「定着率」（漢字・記号などをどの程度記憶し定着を図ることができたかを示したもの）をデータ化した。後日成果物として提示する。

なお「事前・事後アンケート」および研究授業案として作成された「誰でも出来る行事授業」も付属する成果物の一つである。特に「アンケート」は、今後の研究の展開上、より多くの成果をもたらすものと思われる。すなわち「アンケート」と連動した「プログラム」は、新たな研究成果であると同時に、新たな特許取得にもつながるものと考えられる。

また研究授業案も、「CD-R」の中に具体的実例案として提示されることによって、より多くの先生方に供用する予定もある。

(5) 研究成果の学校還元（平成24年3月）

「震災支援」として「行事カード」ならびに「十二支カード」を郵送した。「教育支援」としての位置づけはあるが、コミュニケーションツールとして、カードが本来持つ機能に期待しての支援である。

郵送数は1パック3セット入りの箱を50パック、150セット。なお教育委員会からの要望により「行事カード」をB5版に拡大しパウチしたものを245枚同封した。被災地の小学校を中心に配布していただけるとのことである。授業での様子などをお伺いできればと依頼しての支援となった。被災者の心のケアが「行事カード」を通じてなされるのが最も大事であると思われる。今後の新たな展開もあるかと思いつつ、教育委員会からの連絡を待っている。

以 上